



日本で碁石を用い始めた歴史は比較的新しく明治初期であり、それまでは木石を使用して来た。貝を用いるようになってからは焼蛤で名高い桑名の優秀貝を用いて、大阪の製造業者が市場を独占していた。日向蛤が最初に用いられたのは明治三十年前後からでその奇形的特質をもって一挙に原料的に他を押し間もなく製造技術が原田清吉氏によって日向に導入さるるに及んで、それまで全国に覇を構えていた大阪を忽ち駆逐してしまった。大阪では、日向囲碁に對抗しようとして戦前遠くメキシコの貝や南方海域のオオジャコ等を用いてみたが、殻質緊密を欠き光沢なく、手垢の付着の早い短所のため、いつか姿を消してしまった。今日、桑名は優秀貝を失って衰亡、九十九里浜にも産するが、薄物の下級品しか出来ない。日向蛤を他地に移植しても、碁石になるものは出来ない。ある程度成長しても、奇形的発育にまで至らない。かくて今日、高級碁石は日向蛤の独壇場であり、日向碁石は県の特産となり天下独歩を誇っている。先般、天皇陛下の九州御巡幸にあたり、碁石製造の実況と日向蛤標本を天覧に供したことは周知の通りだが、この標本に対して日向市の碁石研究家平賀儀雄氏「スワブテハマグリ」として、御自身解説註釈された旨筆者に語られた。これは先の滝博士の現地研究の際の記録に基づくものだが、この名称は一切の蛤の類を通ずるメレトリックス属の種名に無いので、筆者から東海水産研究所の技官を通じて、国立科学博物館の滝博士にお伺いしてみた。その結果「スワブテ」とは「唇の厚い」という意味の方言で、和名はチョウセンハマグリに相違ない。唯スワブテハマグリは特に分厚いチョウセンハマグリの意味で日向蛤の別名又は方言として使われるものであるとのことだった。このように、専門家にも特別な名称で呼ばれるほど、

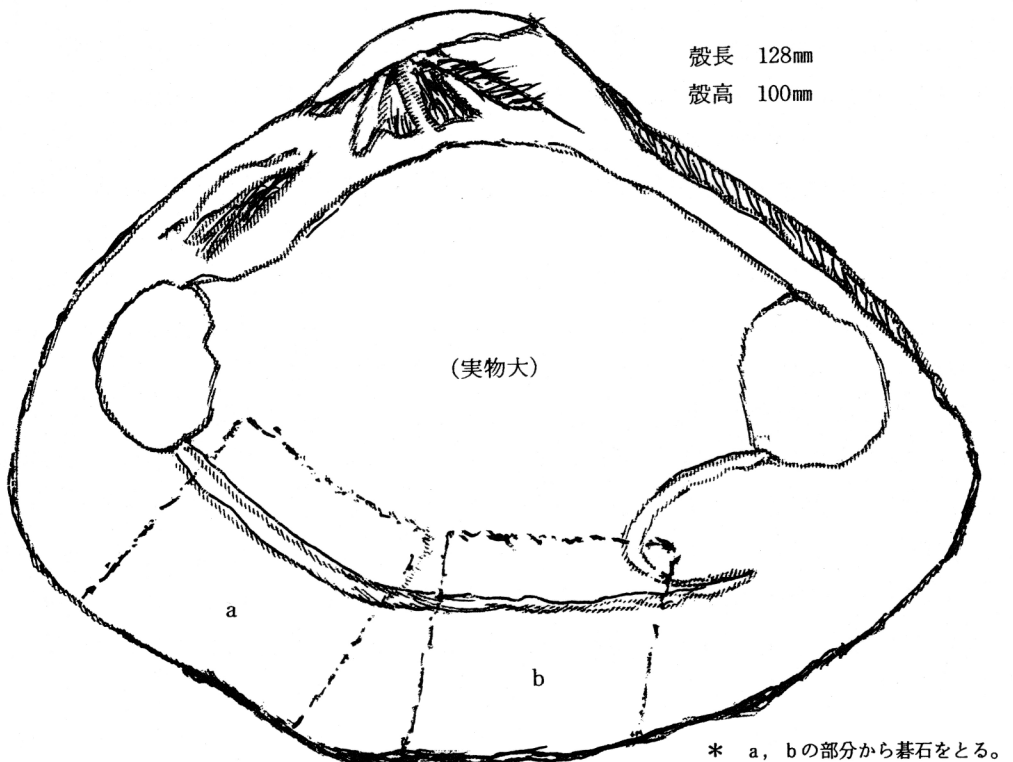


図2 スワブテハマグリ

日向蛤は他にない大きな厚みを持つ特殊品なのである。

今日、碁石用の蛤は手堀りによる種々の方法から、いわゆるモグリによる拾取法、更にサンドボンプによる海底下一丈に及ぶ大がかりな採取方法まで試みている。採取貝は普通には数十年、数百年前に枯死した大形殻を使用する、生貝殻も原料として用いられるが、直接には使用出来ない。生貝では出来上りが見事な光沢を持つが、一年も使用せずとも黄色を帯びて来て太さも一厘位細くなる。それで石のあまり透明で水々しいものは警戒を要する。生貝の場合は少くとも二、三年は特殊な保存法で貯蔵せねばならない。枯死貝は埋没する間に侵されて、生得の色素の外に種々の色素を沈着してくる。それらの色素の付き方によって、製品に、現在業界で区別されている種類を生じてくるのである。

雪印……………石の両面とも純白のもの。最高級品

月印……………片面のみに色素の残るもの。次級品

花印……………両面に何らかの色素の現われるもの。下級品

碁石製造は今日機械化されているが、これは東京より日向一の黒木正一、八百蔵兄弟である。正一氏は業を八百蔵氏に譲って自適の生活にある八十翁となっておられ、弟八百蔵氏が今日、日向市の碁石協同組合長として活躍しておられる。製造工程には、荒取り、耳摺り、面摺り(中摺)、手摺り磨き上げ、艶出し、等級段階があるが、いかに精巧な機械によるとしても、手摺りから先きは多年錬磨の技術者の靈腕が物を言う。精根と熟練を要する特殊技術であり、生れ出るものは、高級品ともなれば精妙無比の芸術品であり、玲ろうたる珠玉にもたとえ得るものである。しかも片殻一枚より通常二個の石、その中一個は下級品の薄物なので上等の石は、わずか一個のみ、貝がやや小型になると石は一個がせいぜい、正に貴重之宝珠である。ところで、碁石は貝殻の中央、或は頂部寄りから採るように思っている人が意外に多い。実際は蛤の腹縁の方(肉足を出すいわゆる口の方)が厚くなっていて、その部分一寸巾が特に堅いので、ここを使用する。三分を越ゆる程の高級碁石は、いかに大きな蛤から採れるか想像して頂きたい。これこそ日向蛤の奇形發育のみが供給に應じ得るところである。

以上、日向碁石蛤の特殊性と碁石とについて筆を進めて来たが、最後にその現況について述べ稿を終ることにしたい。天下独歩のこの碁石蛤に、近年憂慮すべき事態の生じていることは新聞等で御存知であろうと思う。今までも那智黒と通称される那智の黒石と組んで年産三千組を誇っていた日向碁石は、原料貝減少のため昨年度は三割減の二千組にしか達せず、放置せんか、業界衰微はおろか、名産絶滅に及ぼうとしている。先に県の漁業調整規則では、殻長六センチ以下の稚貝を保護し、六ヶ月以内の懲役、一万円以下の罰金という罰則まで設けて乱獲を禁じたが、一部市民の無理解による食用のための乱獲凄まじく、規則も有名無実の有様、加えて業者競合の大構の方法による大量採取、就中、貝桁網(この方法は、今日自粛されている)による生貝大量採取により今日の材料貝の激減を招来している。この蛤、この碁石、特異の天恵を珍重し、愛惜する一貝人として、是非

とも日向蛤の存続を祈念せずに居られない。最近この制限付稚貝保護を手ぬるしとして向かう五ヶ年の全面的採取禁止を申請すると報道されているが、規則が実効を挙げるのは一に人の精神に懸かっている。市民業者の自覚なくしては百千の法令も空に帰する。今日にして施策なれば十年、二十年の近き将来に於いて、日向名産は九十九里浜級に転落する。殷鑑遠からず桑名を見るがよい。大阪業者によって天下に名を成した昔日の桑名の勢威は今日ただ一場の夢となって衰亡している。高級碁石の最後唯一の抛墨日向市を失えば、日本から名品を失うことになり今日までに造られた名品のみが博物館入りして棋史にのみ過去の栄光を空しく讃えることになり終ろう、市民業者の自覚に基づく適切なる措置と県民の理解とを懇望する所以である。

本稿は鹿児島県貝類同好会会報(第七卷)第三・四号—1958年12月に寄稿掲載されたものであります。